



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 昭和初期の新品種を描いた静物画：白瀧幾之助が描いた花を通して                                              |
| Author(s)    | 阿部, 亜紀                                                                      |
| Citation     | デザイン理論. 2022, 79, p. 46-47                                                  |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/86306">https://doi.org/10.18910/86306</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 昭和初期の新品種を描いた静物画

白瀧幾之助が描いた花を通して

阿部 亜紀 福田美術館・京都女子大学大学院在学

はじめに

白瀧幾之助（1873-1960）は、明治後期から昭和期にかけて白馬会や官展を中心に活躍した洋画家である。山本芳翠（1850-1906）や黒田清輝（1866-1924）に師事し、生涯を通じて肖像画・風景画・風俗画・静物画など幅広い画題に取り組んだことで知られる。中でも静物画をはじめ、花を主体とした作品は現存数が多く、対象によって描法や表現が変化する点も、特長のひとつであった。こうして描かれた花の品種は、紫陽花、牡丹、芍薬、薔薇や菊など、多岐にわたる。

本研究では、御子息のお話から白瀧が日本の大手種苗会社である株式会社サカタのタネの創業者・坂田武雄（1888-1984）と遠戚関係であることが判明した。さらに、白瀧が描いた花の絵画の中で、少なくとも《ペチュニア》と《鶏頭》については、坂田が開発し、アメリカで受賞を果たした新品種である可能性が高いことが明らかとなった。本発表ではこの調査の詳細を述べるとともに、近代洋画に描かれた花と、サカタのタネが開発した新品種との関係について述べる。

### 1. 白瀧幾之助と坂田武雄

白瀧幾之助は、明治6年（1873）に兵庫県朝来市生野町に出生した。17歳で上京後、山本芳翠率いる生巧館画塾に入塾し、その後は天真道場、東京美術学校で黒田清輝に師事した。明治37年（1904）から明治43年（1910）にはアメリカ・フランス・イギリスで約7年間留学し、フランス滞在時にはラファエル・コラン（Raphael Collin,

1850-1916）に師事した。帰国後は官展系の画家として活躍し、第8回文部省美術展覧会では《野村氏の像》で二等賞を獲得。その後、帝展の審査員を歴任し昭和27年（1952）に日本芸術院恩賜賞を受賞している。

坂田武雄は、明治21年（1888）12月15日、九州出身の父・伝蔵と母・邑の間に8人兄弟の長男として東京で生まれた。20歳の時に園芸や種苗の基礎を学ぶため欧米へと旅立ち、大正2年（1913）に帰国。その後、横浜市で坂田農園を設立した。当初は欧米向けに百合の球根や苗木の輸出をしていたが、思うようにいかず、大正5年（1916）に種子販売に転換した。その後は、種子の開発が国内外で評価され、事業を軌道に乗せたことで知られる<sup>1</sup>。

先述のとおり、本研究では御遺族への聞き取りにより、白瀧と坂田が遠戚関係であったことが判明した。坂田は大正15年（1926）9月、長野県の資産家である木戸家の五女・木戸美代と結婚した。この木戸美代が白瀧の娘・白瀧須磨の義姉にあたる。また、白瀧が生前所持していたと考えられている一群の写真資料の中にも、2人が北海道へのスキー旅行中に撮影した写真が含まれていた。これにより、白瀧と坂田が親戚であるという事実だけではなく、近しい関係にあったということが明らかとなった。

### 2. 《ペチュニア》

ペチュニアは日本で「朝鮮朝顔」という名で知られ、一重咲きに咲くものが広く知られる。しか

し、本発表でとりあげた、白瀧が昭和13年(1938)頃に制作した2点の《ペチュニア》(いずれも個人蔵)は花卉が幾重にも重なっていた。この花のモデルとして考えられるのが、坂田が開発した八重咲きペチュニアである。坂田は昭和6年(1931)に世界で初めて100%八重咲きペチュニアの「ビクトリアスミックス」の育成に成功し、3年後に世界の種苗会社が新品種を発表し競い合う全米種苗審査会で銀賞を得た<sup>3</sup>。以降、坂田は同会において、様々なペチュニアの新品種を発表し、受賞を重ねている。白瀧が描いた作品のモデルとなったのは、花の形状や色彩から判断すると、前述の「ビクトリアスミックス」の可能性が極めて高い。

### 3. 《鶏頭》

奈良時代にはすでに日本に渡来していたとされている鶏頭も、日本では絵画のモチーフとして馴染みの深い花である。しかし、白瀧作の《鶏頭》(晩年作、個人蔵)は花頭が大きく、葉が花のすぐ下から繁茂する様子が、当時主流であった鶏頭の形状と異なっている。

ペチュニアと同じく鶏頭も坂田が積極的に品種改良に取り組んだ花であった。坂田は昭和10年(1935)に「フレームオブファイヤー」を、昭和39年(1964)に「ファイヤーグロー」を発表し、全米種苗審査会に入賞を果たした。白瀧が描いた《鶏頭》のモデルは、花の姿が酷似していることから後者である可能性が高い。同種は白瀧没後4年に入賞したものだが、縁戚関係にあったという点はもちろん、坂田が白瀧に対して坂田夫妻の肖像画の揮毫や、開発した花の絵を依頼していたことから、坂田が試験的に育成した鶏頭を描いた可能性が考えられる<sup>4</sup>。

また、坂田はパンジーや薔薇についても新品種を開発していた。白瀧がそれらを描いた作品も存在する可能性が高いが、この点については今後の検討課題としたい。

おわりに

以上のように、坂田と白瀧が親戚関係にあったという事実を踏まえて調査研究を進めた結果、白瀧が描いた《ペチュニア》と《鶏頭》は、品種改良の末に誕生した当時最新の品種であった可能性が極めて高いことを指摘することができた。

古来、画家が花の絵を描く際、選択肢のひとつとして珍しい花や外国から渡来した新品種があった。そして近代になると、品種改良の技術が発達したことによって、花はかつてないほどに変化の様相を見せる。白瀧をはじめ当時の画家たちが制作の構想段階で、より新しい花に興味を抱いたことは想像に難くない。しかし、品種数は増え続けているため、花とその時代の特定は、困難になったともいえる。これは言い換えれば、いつ頃開発された新品種であるかが分かれば、作品の制作年代特定にも役に立つ可能性があるということだ。

一方で、坂田のような実業家にとっては、モノクロの写真が一般的であった時代に、自身が開発した花を洋画家に描かせて記録するという意図もあったことだろう。

### 参考文献

- 1 大木英吉『花筐：坂田武雄の足跡』坂田種苗株式会社、1981、pp.1-130
- 2 坂田富美「兄武雄と間島様とのご交際の思い出」坂田正之編『種子に生きる：坂田武雄追想録』坂田種苗株式会社、1985、pp.1-525、p.421
- 3 西尾敏彦「続日本の『農』を拓いた先人たち(57)ガーデニング・ブームの火付け役、『サフィニア』育成に研究者の誇り」、農業共済新聞、第4号、2004
- 4 坂田正之「武雄の生い立ち」坂田正之編『種子に生きる：坂田武雄追想録』坂田種苗株式会社、1980、pp.1-525、p.133